

特定非営利活動法人 日本免疫学会
平成 25 年度後期 Tadamitsu Kishimoto International Travel Award
研究発表報告書

申請者氏名	山川 奈津子	会員番号	0032653
申請者の所属・職名	東海大学総合医学研究所 造血腫瘍分野・奨励研究員		
出席会議名	Keystone Symposia (Inflammation, Infection and Cancer (X1))		
発表論文タイトル	The regulation of “inflammatory niche” with tumor derived small RNAs		

実施結果:

私は 2014 年 3 月 9 日から 14 日まで、カナダのウィスラーで開催された Keystone Symposia へ参加して参りました。本シンポジウムは、”Inflammation, Infection and Cancer”および”Immune Evolution in Cancer”の合同開催となったため、総勢 400 名強のとても賑やかな会となりました。私は”The regulation of “inflammatory niche” by tumor derived small RNAs”というタイトルでポスター発表を行いました。本学会に参加させていただいたことで、がん周囲の免疫細胞に注目した研究や治療が世界では盛んに行われており、既に臨床段階でも成果を挙げていることを改めて学ぶことができました。特に印象的だったのは、様々な製薬会社から勉強のためにいらっしゃっている方々が多かったことです。すなわち、免疫細胞(特に T 細胞とマクロファージ)が今後の新たながん治療ターゲットとして注目を集めている証拠でもあり、私の研究モチベーションの活性化へ強くつながりました。ただし、一言で免疫細胞をターゲットとした治療と申しましても、一方では腫瘍増殖を促進している免疫細胞の不活性化を誘導することで腫瘍の退縮を誘導し、他方では腫瘍を攻撃している免疫細胞をさらに活性化させることで腫瘍増殖を抑制する等、同じ細胞がターゲットでもアプローチが正反対である点が面白くもあり難しいと感じました。現在のところ、こうした免疫細胞をターゲットとした治療法は、従来の薬剤療法や放射線治療と組み合わせることで、より有効な手段となるようです。

私のポスター発表は、腫瘍由来の分泌性小分子 RNA が腫瘍を構成する免疫細胞集団、”炎症性ニッチ”へ与える影響についてであったため、口頭発表されていた演題とはアプローチが少々異なっていました。そのため、分泌性小分子 RNA がマクロファージならびに腫瘍細胞そのものへ与える影響について、私の説明を聞いて頂いた方々からは興味を持っていただけたことが、何より嬉しかったです。今後もこのような発表の機会があったら、積極的に参加したいと強く感じました。

最後にこの場をお借りしまして、本 Award をくださった岸本忠三先生、推薦してくださった三宅健介先生、そして本研究を発表させていただいた幸谷愛先生に心より感謝申し上げます。